

# 女武蔵の五輪書

熊鮭

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

武蔵ちゃんの過去のお話です。

目次

地の巻	一日目	1
水の巻	二日目	16
火の巻	三日目	29
風の巻	四日目	46
空の巻	五日目	59

## 地の巻 一日目

扉から光が漏れていた。

俺は扉をゆっくりと開けて部屋にいる客人の様子を伺う。

「眠れないんですか？不自由なことがあつたら承りますよ」

「い、いや。なんでもない。なんでもないです。不自由なんて一切ありません。むしろ居心地はいいです。ただ…」

宮本武蔵だと名乗る彼女は、バツが悪そうに暗い目で口を尖らせていた。

「格好悪いなあ。と思っていたのです。折角ケリをつけたのに、こんな状態で彷徨っていることが」

「…そうですね」

俺は先程、道端で、血まみれで消えそうな彼女を見つけた。側にいる従者と共に彼女を家に運んだで傷を癒したが、彼女の姿は今もお、徐々にだが消えかけていた。

きつと、あと五日間で傷の有無に関わらず完全に消滅する。

「何かあつたら言ってください」

「そうですね。ありがとう」

俺が部屋から出ると、暗闇から俺の従者である髪を結んだスーツ姿の女性がのそりと姿を現した。

「あのサーヴァントの容態はどうですか」

「もつてあと五日だ。俺と家の力を全部つき込んだけど、これが限界だ」

俺の技術を用いても、あの消滅を阻止することは、不可能だった。

「…お言葉ですが、質問が」

「ん？どうした？」

「どうして彼女にここまでのご執心を？サーヴァントとはいえ、消えかけた霊だったのですよね？」

「ああ、それはね…」

「ちよつと、いい？」

言いかけると、扉が開いて彼女が手招きしていた。

「どうしました?」

「お願いがあつてき。入ってもらつていい? そのスーツの貴方も」  
「分かりました」

俺たちは彼女に促されるまま部屋に入り、正座した彼女の前に思わずこちらも正座した。

「うくん、なんか緊張する。やっぱこんな畏まって頼むタチじゃないしなあ」

彼女は照れ臭そうに笑つて頬をかいた。

「それで、お願いとは? 自分が出来るなら何でもしますよ」

俺が尋ねると、彼女はスイッチを切り替えたのか、表情を真剣なものに変えて、あぐらに座り直した。

「聞いて欲しいのです。私こと女武蔵の生き様を」

「まあ、話を聞くくらいなら全然構いませんよ」

(何を言っているのですか!?)

俺が女武蔵と名乗る人の依頼を受けると、俺の従者が念話を通して反対した。

(今の貴方の置かれた状況を鑑みて下さい! そんなことをしている暇はもう)

(ごめん。ちよつと主人の我儘を聞いてくれるか?)

(……しようがないですね。分かりました)

(ありがとうございます)

「あの、大丈夫?」

俺たちが念話で会話していると、女武蔵が何も喋らなくなったこちらを心配してか、俺の目の前で手を振ってみせた。

「ああ、大丈夫です。それじゃあ、どうぞ」

「おーけー、それじゃあ、よろしくね」

私は物心ついた頃から、いや多分ずっと前から虐待を受けていました。

私の父は新免無二斎という剣豪。あのクソ親父は私が女だから、そ

してこの目が宝の持ち腐れだからだとかで私を随分嫌っていたのです。

時代が時代、女子おなごが剣を握るのは如何なものかとされる時代に劍豪の家に生まれたのだから、当然といえば当然なのでしょう。

でも、私はそれがとても悔しかった。今考えると、私が剣を極めようとした最初の動機は親父殿への復讐って部分も多かったのかな。

それから私は何年か剣の鍛錬を積んだ後、剣を握ってクソ親父に挑みました。

「クソ親父ッ！覚悟ッ！」

蟋蟀コロロギがうるさくなく頃、私はある日の夜、齡十にして実の親を切る決意をして、食事中の親父に刀を抜いて飛びかかった。

しかし憎つくき奴は一切動じずの私を柱に叩きつけて、更に気持ち悪いものを見るような目で見下した上で、何事もなかったかのように食事を再開した。

(クソ…)

悔しさに耐えかねた私はすぐに刀を拾って部屋を飛び出して、屋敷の前にある自分で建てた小屋まで撤退した。屋敷で部屋が充てがわれなかった私は、そこで暮らすしかなかった。

「傷は如何ですか！姫さま！」

「うん、助けて」

しかし、屋敷の中でも、私を助けようとしてくれた人達がいた。

私が親父に叩きつけられた時は、ある奉公人の人が薬草を入れた籠を持って来てくれた。

他に来たのは、母上、奉公人の人達、村の人達、時々親父の部下。もしかしたら、私が住んでいた宮本村で親父以外の全ての人が私の影の味方だったかもしれない。

「取り敢えず、安静にしてください。これは傷によく効く薬草でございます。染みますが辛抱してください」

彼女はそう言って幹部に薬草を塗り込んだ。滲むように染みていく痛みに私は何度か悶えた。

「…くっ、あ、っ」

私は痛みに耐えながら悔しさを噛み締める。二年も鍛錬を積んだのに、奴の動きが見えなかった。だが、まだ負けたわけじゃない。あいつは『勝った』のかの字も言っていない。だから、勝負は決まっていないのだから、この後勝てば良い。

私はそう切り替えて、親父への悔しさを燃やしながら、眠りについた。

次の日から、私はまた鍛錬を始めた。

助けに来てくれる人達に頼んで、書を持ち込んで貰ったり、稽古をつけてもらった。私はやっぱり女子なので、腕力は褒められたものではなかったが、この目のお陰で食らいつくことができた。

訓練をしていく度にこの力は洗練されるようになったようで、十二になる頃には、親父殿の部下と互角に戦えるようになった。

「やはり、姫様はやりますなあ、遂に私も追いつかれてしまった」

「いや、それほどでもなくなかないです！」

ある日、私は昼餉の休憩中に、親父の部下の一人に褒められた。『女子なのにも関わらず』という言葉が付いていなかったことに深く感動した私は、かなり照れていた。

「それでどうでしょう、この腕ならあのクソ親父に一矢報いられると思いますか？」

「それは……お言葉ながら、難しいでしょうな。あの方は家内にいる誰よりも圧倒的に上手でございます。正直、我々が束になっても蹂躪されるだけでしょう」

「うわ、物の怪じゃん」

「ええ、正に無二様は剣に取り憑かれた物の怪と言えるでしょう」

私はなるほどと納得しつつも、彼の言動に引いた。

「えっと、貴方の主人ってクソ親父ですよね？」

「そうですか？」

(クソ親父って敬われてないんだなあ)

「あ、はい。そうなんです。あはは〜」

剣だけに専心している主君はそう褒められたものではないのかもしれない。話を聞く限り、悪政という評判は聞かないが、良い政治をしているという話も聞かない。あの親父は政治家的には美点も欠点もない。それは彼らのとっては支えがいのない主君なのだろうか。

「そう言えば、どうしてみんなは私を鍛えてくれるんですか？」

私はクソ親父の話題を有耶無耶しながら、話題を変えるために前から疑問に思ったことを尋ねた。

すると彼は一度顎に手を置いて考えを一巡させてから答えた。

「それは、きつと皆が姫様に殿を超えて欲しいからでしょうな」

「えつと…どうしてでしょうか。私は二年前に完全に伏せられたのですが、今でも勝てる気がしないのですが」

「確かに。ただあの時の、二年前の姫様の動きは、素人臭くおぼつかなかったが、素晴らしかった」

「えつと、褒めてます？それとも貶してます？」

「勿論、褒めております。我々、家臣一同はあの動きを見たときに、もしかしたら姫様は無二様を倒せるのではないか。そう予感したのでございます」

「予感とは言っても、それは、確信とかじゃなくて半ば願望でしょう？」

「はは、そうですね。絶対に無二様を超えるだろうとは、思えませんでしたが。しかし」

親父の部下は笑いながら握り飯を側において、私に向き直った。

「アレを超えられる可能性があるのは、貴方しかいらつしやらないのです。どうかお願いでございます。無二様を超えて頂きたい」

「い、いや。畏まらなくていいから。というか、なんでそんなに私に期待をかけるのですか!？」

「正直、あの、のっぺらぼうのように表情を変えない無二様が動揺しきっているところを見たいのです」

「うわゝ、正直だなく〜！」

「さて、丁度良い頃合いです。そろそろ稽古を再開しましょう！姫様



！」

「ええ！」

私はその日、刀を両手に持つ戦い方を披露した。

そんな風に、お天道様が顔を出している時は稽古、出していない時は読書。

この時代の普通だったらどこかの家に嫁ぐ頃合いなのかもしれないなかつたけれど、私はそんなの御構い無しに自分のことするべき没頭していました。

そして、一年の時間が過ぎた頃、私の剣の腕は全ての親父の部下を超えるほどのものになっていたので。

私は齡十三にして、またクソ親父に挑むことを決意しました。私の二刀使う戦い方がどこまで届くか気になったからです。

二つ刀を携えて三年ぶりに屋敷の門の前に立つ。時間は夜餉時。

あいつが料理を口にした瞬間に、奴に飛びかかる。頭の中での予想は済ませた。

漏らされるとは思っていないが、屋敷の関係者には誰にも言っていない。わたしが一人で考えた作戦だ。

「さて、行きますか」

上から物音立てずに忍び込んで、林に身を隠し、様子を伺う。息を潜めて、目を凝らす。

限りなく削った究極の一手を掴み取る。

その為に、私はここまでの時間を費やしてきた。

せめて、奴に刀傷一つつけてやる。

一刻もしない内に、クソ親父の前に食事が運ばれると、奴は絡繰のような無表情で箸を取って、米を口に運ぼうとした。

（———今だ!!）

好機とみた瞬間に、林から飛び出して、一直線に走った。

何よりも早く、速く、疾く。

新免無二齋に向かって走った。

剣を抜いて、奴の喉元へ剣先を向ける。

「新免無二齋・勝負！」

クソ親父はすぐに刀を手にとり取って私の初撃を防いだ。

油断は禁物だ。奴は直ぐに反撃に移る。

もう、昔の私じゃないと目を凝らす。

今の私は奴の動きを辛うじて捉えることができた。

私の剣技は、これからが本番だ。

相手の剣戟を捌き、奴に究極の一撃をかましてやる。

まず一つ、奴の反撃を受け止めた。

奴は一刀。私は二刀。一つ受け流せば、私の空いた一刀で首を取ることが出来る。

しかし、次の瞬間には、私の手には刀が一本しかなかった。

「なっ……………」

私の初撃の刀は私が見えぬ速さで弾き飛ばされて、部屋の襖に刺さっていた。

しかし、それを取りに行くわけにもいかない。もし一度でも背中を見せたら、目の前のこいつは私を躊躇なく殺す。

残る一刀で私は反撃を続ける刀を受けて、空いた手で腕を抑え、足で奴の顔を横に蹴った。

確実に足は奴を捉えて、新免無二齋の頬に血を流させた。

だが、まだ止まらない。

奴は傷など意に介さずに私の腕を掴んで、飛ばされた刀が無い方向へ私を投げ飛ばした。

飛ばされながらも、奴には目を逸らさぬように見つめながら、次の手を考える。

まず、奴は吹き飛ばされた私に追い打ちを仕掛けてくるに違いない。

突きにしろ、撫で斬りにしろ、それを躲せなくては話にならない。飛ばされる私よりも早く迫るクソ親父を見ながら、互いの刀をぶつ

けるように振りかぶった。

私と奴では腕力に差がありすぎる。もし、互いの刀をぶつければ、私はまた宙を舞うこととなるだろう。

だが、それでいい。

私が飛ぶ先に刀が有れば、また私は刀の数における有利を得る。

確かに、両手で振りかぶって力負けする相手の攻撃を、片手の刀で対応することなどは出来ない。

でも、これを陽動で使えば上出来だ。

私は刺さる刀を引き抜いて、奴に思いつきり投げた。

それと同時に私の身も奴に向かって飛び出した。

これならどうだ。と飛び込みながら様子を伺う。

奴は相変わらずに奴は顔を歪めず、投げられた刀を天井に弾き飛ばした。

それでも構わず、私はさらに速度を上げて、奴に迫った。

奴は天井に剣先を向けている。

なら、私を上段から切るのが道理だ。

あの血の気がないクソ親父が『一旦構え戻して別の方向から切る』なんていう無駄な行動をするはずがない。

予測通りに奴は上段から刀を振り下ろした。

そこで私は足を止め、頬を掠めるくらいの場所で斬撃を避け、降ろ

された奴の刀を踏み、畳に深々と突き刺させた。

流石の奴でも、深く刺さった刀を簡単には抜けまい。

私は躊躇わずに奴の眉間に刀を突き立てた。

しかし、刀が奴の脳を貫くことはなく、また吹き飛ばされた。

クソ親父はすぐに刀から手を離して私の腹に一発かました。

「クハッ…」

口から血が溢れて、意識が薄くなる。

不味い。このままでは殺される。

「曲者か!？」

ここで、親父の部下達が駆け寄る足音と、主人を気遣う大声が聞こえた。

この声に気を取られた無二斎を見逃さなかった私は、意識を叩き起こして足を引きずりながら屋敷を抜け出した。

「クソお、まだダメかあ」

私は帰り道に朧気になる視界をどうにか正しながら愚痴をこぼした。

これでも奴に刀は届かなかった。

私は血反吐を吐きながら、自分の動きを考え直した。

きつとあのクソ親父にとって、私の不意打ちは見え見えだったのだろう。

こちらとしては殺気を殺していたつもりだが、まだまだ殺しきれていないらしい。

そして、私の技量についてだが、差はまだまだ埋まっていないように思えた。

蹴りを浴びせられたのは、確実にまぐれだった。

私の立てた作戦は全て圧倒的な技と力と経験で伏せられた。

「どうしようかなあ。勝てる未来が浮かばない」

私はため息をついた。

アレがもし本気を出していないとすれば、絶望しかない。

まるで、奴は来るものを圧倒する山嵐のような戦いぶりだった。

少しすると、背後からお人数の足音が聞こえた。

「姫様がいたぞ!!」

「大丈夫ですか、姫様!!」

親父殿の部下が追いついたようだった。

「うくん。ごめんなさいね。勝てなかった」

家臣の人たちが集まって私を囲んだ時に、私は彼らに謝罪した。

「いえいえ、滅相もございませぬ。あなたは殿の顔に一つ蹴りを入れた。それだけで我々はこの上なく嬉しいです」

「はは、本当に、この家は忠臣に恵まれないわね」

私は私自身が生まれた家のおかしさに笑いながら、ゆっくりと目を閉じた。

ええ、あの時の私とクソ親父との差は歴然としていました。今？勿論、私の方が上です。私は奴の行けなかつたの先に至つたのだから。

この技量で殺し合えばどうなるかな？

ん。今はそんなこと考えてる場合じゃありませんでした。それでは続きと洒落込みましょう。

私はあのクソ親父に負けた後も、その小屋周辺で一年間、稽古と学問に励みました。

「ふう、ふう、ふう」

疲れた。

私は水分を補給しながら、限界を感じていた。

「このままじゃダメなのかなあ」

ここには、いつまでもクソ親父に勝てない気がした。

「となると……旅かなあ」

私はいつも稽古をする山から村、その先の地平線を見渡した。

あの先にはあのクソ親父程の達人が沢山いる、とは言わずとも、私より強い人々は沢山いるはずだ。強者としてのぎを削れば、私はもっと高みを目指せるはずだ。

「よし、決めた！」

私は急いで山を降りて、偶々小屋に来ていた母上に旅をする旨の話をした。

しかし彼女は、私の話を聞いてもさほど驚かなかつた。

「いつかそうすると思つていましたよ。ここではもう限界なのね」

私の母親はやつとこの言葉が来たか、とでも言うような表情で続けた。

「……そろそろ頃合いか」

「……？」

「貴方に話しておくことがあります。旅に出る前に聞きなさい」

母上は今までにないほど神妙な顔をして私に語った。

「まず、あなたのその目は、私の由来なの。だから…その…迷惑をかけていたらごめんなさい」

「いえいえ、迷惑なんてないですよ！むしろ感謝しています！この目がなかったら、私は今頃この世にいなかったです」

「そう…迷惑じゃないなら…って、本当?!私は超迷惑だったんだけど！」

「えっ！それほど迷惑ですかねえ？」

「……………ああ、そうか。まだね」

彼女は含みのあるような様子で俯いたが、すぐに顔を上げた。

「いや、なんでもないわ。気にしてないなら。でも、これから続く旅はきつと苦難の連続のはず、どんなことがあっても、止まることなく挫けないように。挫けたら終わりよ」

彼女は私の肩を叩いて、元気づけるように言った。

「あーあと、旅に出るのは、もう数日後にきなさい。屋敷と村のみんなが交代で挨拶するから」

そして、彼女はこう付け加えてから小屋を急ぎ足で出て行った。

次の日、毎日私に食べ物くれた村の人たちがこぞって集まってきた。

ある人からは乾飯を、ある人からは竹の水飲みを、またある人からは赤い傘を頂いた。

何故私にくれたのかと聞くと全員

「姫様は宮本村に住む我々にとつてはお天道様なのです」

と言った。

次の日、毎日私に書を持ち込んできてくれた奉公人の人たちが交代で来た。

ある人からはお召し物を、ある人からは珍しい異国の書を、ある人からは髪飾りを頂いた。

何故私にくれたのかと聞くと全員

「姫様には頑張って欲しいのです」

と言った。

次の日、毎日私に稽古をつけてくれたクソ親父の家臣の人たちが交代で来た。

ある人からは草鞋の替えを、ある人からは刀を、ある人からは兵法書を頂いた。

何故私にくれたのかと聞くと全員

「姫様には無二様を超えて欲しいのです」

と言った。

次の日、私の母親が、来た。

私は、彼らが言った『私に物をくれる動機』について話した。

「ある意味、貴方は周りの人から見て希望だったのよ。うん、そんな大層な性格じゃないのは分かっている。でも、困難な課題に一所懸命刃向かう弱者は応援したく見えるのよ」

「成る程」

「うん、そういうこと。みんなが貴方を応援しているんだから、頑張つてね」

「はい！あのクソ親父を超えて帰ってきますー！」

私はみんながくれた物を詰めて、着けて、私は戸に手をかけた。

「その心意気良しーそれじゃあ、最後に旅の安全を願って、寂しくならないためのおまじないをしましょう」

私の母親は何か呪文を唱えたが、私には聞き取ることのできない言葉だった。

「はい、これで大丈夫！いつてらっしやい！」

彼女は一度私に抱きついてから、頭を軽く撫でて力強く戸の外へ押し出した。

抱きしめられた時、私の心は溶けそうなくらい暖かくなった。

「……えつと今のは」

「ああ、ハグっていうの。南蛮から伝わってきた親愛を伝える時の所作で……って、うん。慌ててちやみっともないや」

体は離れたはずなのに私の中で、温もりが残っている。

私にとってそれは涙が出るほど嬉しかった。

母も涙を流して俯いている。

「……………ありがとうございます!!! 行ってきます!!!」

「ええ、行ってらっしゃい」

彼女の笑顔は、涙でよく見えなかったが、まるで観音様のような笑顔だった気がする。

私は今まで住んでいた小屋を後にして、道沿いに歩き始めた。

しばらく歩くと、後ろから数人の武士が私の名前を呼んで走ってきた。

「お待ちください!」

「どうしたの? 平田さん」

彼は親父殿の知り合いの一人だった。幼少期に数回会った人だが、いい人だったことを記憶している。

「これを、貴方に。貴方の母上から旅に出てくるという旨を聞き、飛んで参りました」

「えっと、これは」

「我が家家宝の、『火』を司るとされる名刀です。どうかこれを」

「ええ! いいんですか!? これ、家宝なんでしよう!」

私には、否応なく家臣の家の家宝が手渡された。

手にはずっしりと家宝の重みが伝わっている。

「構いません! 持って行ってくだされ」

「でも…………」

「あ、無二様」

「本当?! 逃げなきや!」

私はこの時、本当にクソ親父が来たと思って全速力で走った。今思えば、あれは私の背中を押すための嘘だったのだろう。

こんな感じで私の長い長い旅は始まったのです。

ああ、そう武蔵国にいた時に、こんなことがありました。



森の中を歩いていると、落ち武者のような格好をした長身の大男が横から現れた。

きつと私を女だからとかいう理由で見下しているのだろう。目から下卑た視線から奴の心の内が伺えた。

「我こそは佐々木小次郎。名の知れぬ剣士よ。命が惜しくなければここに持っているものを全て置いて行くのだな」

「何を。貴様のような醜男にくれるような物は持っていない！我が名は――」

ここで私は言葉が詰まった。

クソ親父のつけた名前を名乗るのが嫌だったからだ。

「我が名は宮本武蔵！逆に貴様の身ぐるみ剥がしてやる！」

こういう傲慢そうな奴は高が知れているので、灸を据えてやりました。

まさか、佐々木小次郎が別の世界ではあんな存在であることは、私は知る由もなかったのです。

「さて、キリもいいところですし、今日はここまでにしますか」

彼女はうんと腕を伸ばしながら、終わりを告げた。

「えっと、まだ話は途中ですよね？」

俺は拍子抜けして、素っ頓狂な顔をしてしまった。

「ええ、途中よ。でも、そちらにも色々事情があつて、それほど遅くまでは起きられないんでしょう。そこのお姉さんが目で言ってた」

「……すいません。うちの――」

「いやいや、大丈夫だつて。私が消えるまで、今日を入れた五日間で、きつちり語り終えますから」

俺は彼女が自身の消滅期限を正確に把握できていることに驚いた。

どうして彼女は死期を悟っていながら、こうも自然体に過ごしているのだろう。

「そんな暗い顔しないの。私の記憶を渡せる程の猶予をくれた君には感謝してるんだから」

彼女は心から笑っていた。

「それじゃあ、また明日。いつ頃が都合が良いですか？」

「うくん、またこの時間でいいかな。明日は君の家の店のうどんを食べてみたいし」

「分かりました。では、また明日、この時間に」

## 水の巻 二日目

俺たちは昨日決めた時間の十分くらい前に、彼女のいる扉の前に着いてしまった。

「何故戸惑うのです。とつとと入った方がいいでしょう」

「いやさ、もし早すぎて彼女に怒られたら――」

「貴方はネガティブ過ぎます。流石に……」

「……流石に怒りません」

扉の前での問答で気づいたのか、宮本武蔵から扉を開けてくれた。

「ほらほら、入った入った」

俺たちは彼女に誘導されるまま、昨日と同じ場所に座った。

「さて、昨日は私の世界の佐々木小次郎ってところまで話したのよね」

「はい。そうですね」

彼女の『私の世界』という表現が気にかかった。

まるで、彼女はこの世界を旅をしているような物言いだった。

「ん。なんだか不思議そうな目をしてるわね。勿体ぶらずに言っておきましょう。私は、世界線を移動します。漂流ドリフトって言うんだけど――」

本当に世界を旅していた。

漂流ドリフトが始まったのは、きつとあの時。

私は陸奥国いた頃、私は空腹で悩まされていました。

「ううん」

竹の水飲みを口にして乾いた喉を潤そうと試みる。

しかし、そこからは一滴の水も流れなかった。

ここ数日何も飲んでいない。

「まずいな、この近くに川あったっけ」

いくら見渡しても川は見えず、水の音も聞こえない。

しかも腹の虫が鳴って空腹を告げている。

ここ数日何も食べていない。

このままでは比喩表現ではなく、本当にお腹と背中がくつつく。というか、あれだけクソ親父を倒すために強くなると息巻いていたのに、空腹餓死するのは余りにも格好がつかない。

まずい、ここは一挙手一投足の消費する気力を考えて行動しなければならぬ。

まず私は日陰に移動して今の自分の状況を確認した。

乾飯なし、水もなし、辺りに食事が出来そうな店もなし。

あるのは捨てられたであろう、朽ちた寺だけ。

(くそつ、山入る前に準備しとけばよかったなあ)

今までは私の身ぐるみを剥がそうとする山賊どもを返り討ちにすれば、水や食料を手に入れることが出来たが、ここまで暴れまわると、山賊たちから狙われなくなってしまいうようで、奴らと全然会わなくなってしまうた。

この前も、山賊の一団を見かけて刀を抜いたが、私を見るなり尻尾を巻いて逃げてしまった。

これは私の過ちだ。今度からはしっかりと準備をしてから山に入ろう。

と、言っている場合ではない。

取り敢えず、あの古い寺に入ってみよう。この蒸し暑さで倒れる前に屋内に入ったほうがいい。

私は千鳥足で境内の中に入った。

中には何十年も人は訪れていないようで、蜘蛛の巣が張ってあったし、所々に穴が開いていたし、庭は雑草だらけだった。

当てもなく彷徨って本堂に入ると、観音様の前にほかほかの食事が捧げられていた。

やけに湯気が立っていて、いい匂いが私の鼻をくすぐった。

ゴクリ：

私は唾を飲み込んだ。

いや、流石にまずい。私は神前に捧げられたものを食べるなんて、そんな罰当たりなことが出来るほど落ちぶれていないはずだ。

いくら極限状態でも、そんなことなんてありえない。

私だって仏道に帰依している。そんな不遜なことが出来るなんて

「いったただつきまーす!!」

どうしてだろう。体が勝手に動いてる。

……

「ご馳走さまでした!」

しょうがない。

だってあんな場所に、不自然に、作りたてのご飯が置いてある方が悪い。

いや、もしかしたらあれは観音様のからの慈悲である可能性さえある。

そう、今までの私の行いを振り返ってみれば分かるはずだ。

親に刃を向けて殺そうとする親不孝。剣士たちとの果たし合い。道中で強盗を倒し、逆に身ぐるみを剥がす。美少年、美少女の観察…。

あれ、私何してんだっけ。

(うわ、ろくなことしてない気がする)

私は満腹になりながら境内を出ようとした。

すると、誤って脆いと床を踏んでしまい、足元が崩れ、落下し、私は別の世界に行ってしまった。

「いや、ちょっと待ってください。脈絡がなさすぎるのですが」

俺は思わず、口を挟んでしまった。

第二魔法の真似事は簡単に出来るものじゃない。

「えっと、確かこの目の所為らしいわね。私はそういう、世界を移動しちゃう性質みたい」

……

もしかしたら、根源や魔法に近づくための1番の近道は、代々研究を受け継ぐことじゃなくて、到達を望まないことなのかもしれない。

「それじゃあ、話に戻りましょう。まずは最初の世界ね」

私が目を覚ますと、そこは山の中だった。

「えつと……ここはどこ？」

いや、さつきも山の中にいたが、ここはあの古い寺の中じゃない。

私は確か、足場が壊れて落ちて…

(まさか、下が空洞になって、転がり落ちたってこと?)

しかし辺りにそれらしき空洞はない。あるのは、季節外れの紅葉と、戦いの声。

(声?)

私は戦いの声ができる方へ向かったそれを眺めた。

山の麓で牛車を連れた一団が山賊に襲われているようだった。

どうせなら、私を襲って逆に持つてるものを奪われればいいのに、と思いつながら、私は気づかれないように山を降りた。

あれだけ沢山の人を連れられるのは、相当な身分の貴族様の筈だ。報酬をたんまり貰うことができれば、しばらくは苦労せずに生活できる。

しかし、降りている間に配下の武士たちに山賊たちは続々と倒されていく。

(待って、もしかして、あの人達。全員私以上に強くない!?)

世の中は広いらしく、私はまだまだ未熟者らしい。

あの山賊たちが、まるで紙切れのように四肢が千切れていく。

急いで行かなければ、私の手柄がなくなってしまう。

すると、向かい側から何人か、山賊の残りが弓を携えて飛び出したのを見つけた。

まだ護衛の武士たちは、彼らに気づいていない。

ならばと、私は刀を投げ、弓を引く腕に命中させた。

思わぬ乱入で戦場は一瞬静まる。

「我が名は宮本武蔵！助太刀いたす！」

名乗りを上げながら、行列を飛び越え、残りの山賊を切り倒した。すると、私の周りを護衛の武士たちが囲んで武器と殺気を向けた。

「何を言うか！女の宮本武蔵なぞいるか！捕らえよ！」

「ちよ、暫く暫く！ただの、同姓同名なだけです！話を聞いてください！」

この時私は『男の宮本武蔵』の存在を知りました。

初めは偶々だと思っていて、私が『男の宮本武蔵』について詳しく知るの、この次の世界、とある人形師によるお話からです。

え？人形師が気になるの？

まあまあ、落ち着いて。

私は疑いは解いて、しばらく傭兵として雇ってもらい、報酬として沢山のお金を貰った後、守っていた姫と面会する機会を得ました。

「面を上げよ」

「ははっ」

私はゆつくりと顔を上げて、守ってきた姫様の顔を見た。

(やばっ、すごい見目麗しい!!何この顔、凶器じゃない!!)

私はしばらく彼女の顔を凝視してしまった。

彼女は幼いながらも気品があつて、端正な顔立ちをしていた。

そしてお召し物もとても優雅だった。私は奉公人の人たちから頂いた正装を着ていたが、それも比べ物にならない。

「どうしたのかしら？」

「いえ、顔が余りにも見目麗しくて見惚れてしまつて…」

「ふふ、やっぱり可笑しな人ね。呼んだ甲斐があつたわ」

「あの…何故私に御尊顔を見せて頂けたのでしょうか？」

「側近から女の宮本武蔵を雇ったとの話を聞きました、是非直に話をしたいと思いましたの。そして貴方、旅をなさっているのでしょうか？」

「お話を聞かせて」

「はい、私めの駄話で良ければ」

私は自分の置かれた境遇を、あの憎つくきクソ親父と暖かい他の屋敷や村のみんなのことや、私が歩んだ旅路について話した。

「ふふふ、貴方の面白かったわ。それじゃあ、褒美を取らせましょう」  
彼女は近くの者に耳打ちして、重そうな刀を持って来させた。

「これは『風』を司るとされる刀です。貴方、刀を数本失ったのでしよう。これを持って行きなさい」

「ええー！いいんですか!?!」

「勿論、楽しませて貰ったお礼よ。ずっと倉で眠っていた物だから、遠慮せず貰って」

「…はい！ありがたく頂戴します！」

私はそれを受け取って、彼女の寝殿造の邸宅を後にした。

門を出て、今度はしっかりと準備をして山に入り、緑を眺める。

やってきた強盗はこまめに倒して補給。

そんな日々がしばらく続いたある日、私は虚無の穴を見つけた。

これは、私が初めて見た、世界の外へと通じる穴だった。

穴の中は星のような物がキラキラと輝いていて、私はそこに無意識に惹かれて、思わず足を踏み入れた。

私が足を踏み入れると、吸い込まれるように孔に引き込まれた。

私はそれこそ宇宙のような場所を自由落下して、真下にある光に近づいて、包まれた。

そして光が消えると、そこは異世界だった。

「なんじゃこり!!!」

地面は黒くて、おっきい箱が走っていて、黒い糸で繋がれたら灰色の柱が等間隔に立っている。私は摩訶不思議な物体たちに混乱して足が動かなかった。

「嘘でしょ嘘でしょ」

どうしよう、どうしようと、辺りを見回すして、丁度目近くにあった建物？らしきものが目に入った。

（取り敢えず、あの建物に入ってみましょう。どうということなのか知



らなくちや)

「ごめんください」

返事はない。

私はその建物にゆっくりと入って階段を登る。コツンコツン、と足音だけが響いて他には何も聞こえない。

丁度二階に登った時に殺気を感じた。

すぐに剣を抜き、迫る赤い物体を叩き切った。

「勝手に入ってしまったってごめんなさい。ちよつと教えてもらいたいことがあって…」

すると、上の階から足音を立てて、大きな荷物を持って肩に赤い猫を乗せた赤い髪の女性が降りてきた。

「急に結界の中に湧き上がるとは、日が出ていて、さらに人目につくところで空間転移か？何のつもりだ？」

「くうかんでんい？妖術とかの類は使ってないわよ」

「妖術か、変わった物言いだな。私を標本にしに来たんじやないのか？」

「私そんな悪趣味じやないわよ。教えてもらいたいことがあって来ただけで」

私は自己紹介をしたり、ここまでついた経緯について話したりして、説得しようと試みた。

「お前正気か？私に今の説明されたことを鵜呑みにしろと？私から見ただお前は、宮本武蔵を名乗る不審者だぞ」

「そんなに酷いのですか!?宮本武蔵って名前が！」

「いや、酷いも何も。お前の名前をつけた親、可笑いぞ」

「えつと…少しお話してもらっていいですか？」

私は『宮本武蔵という名前』に興味があったので、さらに聞くことにした。

「ああ、いいぞ。どうやら知らないようだからな」

私は彼女としばらく階段で自分がここに来た経緯を話した。

「並行世界への漂流ドリフトか。珍しいな。夢で異世界に渡るといったことはごくごく稀にあるが…」

「何か知ってるんですか!？」

今経験している不思議な事態について知りたかった私は、藁にもすがる思いで食いついた。

「知ってはいるが…ちよつとがつつきすぎないか？」

「ええ、知りたいので」

私のその言葉を聞くと、彼女はニヤリと頬を歪めた。

「分かった。それじゃあ取引だ。話を聞く限り、君は用心棒もやっていたんだろう。ちよつと殺しを手伝って欲しいやつがいる。引き受けてくれるか？」

「ありがとうございます！謹んでお受けします！」

「交渉成立だな。上に上がれ。お前の気になることを話してやろう」

私は彼女の誘導のまま四階に上がって、『そこに座ってくれ』と指示された物に座った。

「それで、どこから話そうか」

「えっと、まず貴方のお名前を聞かせてもよろしいでしょうか」

「ああ、青崎橙子だ」

彼女は手元から小さい管を出して火をつけた。

私はそれをまじまじと見つめてしまった。

「ん？これはタバコだ」

「へえ、タバコ…」

「話を戻そう。まず、並行世界という概念についてだ」

私は彼女から並行世界の存在、編纂事象と剪定事象の違いについてまず教わり、どういうわけか、私はその並行世界を移動できるということを知った。

「なるほど、それで、私は編纂と剪定、どちらの出身なのでしょうか」

「それは分らん。こっちが聞きたい」

「でも、橙子さんの世界では、男の宮本武蔵が当たり前なんですよね？」

「まあその通りだが、歴史が歪められて伝えられた可能性だってある。歴史なんて、都合のいい事柄で積み上げられた物と言っている。男とか女だとか、存在さえも、今を生きる私たちにはこの目で確かめる事

なんて出来ない」

彼女はそう言つて、腕にある物で何かを確認した。

「そろそろ仕事の時間だ。ついて来てもらおう」

私は、今度は地下の部屋に誘導された。

「獲物とこの世界の常識については、この中で話をしよう。乗れ」

そこにはすごく大きな箱にすごい大きな車輪が付いたものがあった。

私はその大きさに俄然としてしまった。

「ああ、これは車といつてな、高速で移動できる代物だ」

「な、なるほど。それでは、乗ります」

私はゆっくりとそれに乗った。

席は固くて、見える景色が違つて、かなり違和感があつた。

橙子さんが座つた方は何だかいろんなものがあるので、不可思議に囲まれた私は、思わず身を縮めてしまった。

「狙うのはこいつだ」

彼女は車を発進させると、懐から紙を数枚取り出して、私へ寄越した。

「私は追われている身でな。ちよくちよく追つ手が来るんだ」

「えつと、さつきの標本がなんとかの奴ですか？」

「ああ。そうだ。できそうか？」

「できるもなにも、あの妖術みたいなのを使うんですよね。…どうかな」

「妖術じゃなくて、魔術なんだがな…。でも、安心しろ。お前には、そういうものを切る才能がある。私のビルに入った時、私の魔術を切つただろう。あの要領だ」

「は、はあ」

「それじゃあ、よろしく頼むよ」

私は彼女に乗せられるまま、空港という場所に連れられた。

「荷物が沢山を置いてある場所に、帯刀しているスーツ姿の外人がいるだろう」

「あの金髪の男ですね」

私たちは暗くなった頃に空港の近くで一度車を止め、双眼鏡で獲物を確認していた。

「そうだ。やつが標的だ。今から私はお前に魔術をかけて、違和感のない服装に錯覚させる。それで、奴を後ろから殺してくれ。それと…」

「それと？」

(こちらからはこうやって連絡させてもらう)

「わあ、頭の中に直接…」

(慣れてくれ。それじゃ、よろしく)

彼女は車の扉を開けて、私を外に押し出した。

私は殺気を殺し、何気ない様子で、目標の場所へ向かった。

そして、首を刎ねた。

思ったよりも楽だった。

(待て、まだ終わっていない！)

と思った瞬間に橙子さんの連絡が来た。

私はすぐに首なし死体の方へ目を向ける。

「クソオ！貴様！あの傷んだ赤色の手下か！」

首を切ったのに、その男は切り離された首から声を上げて、物の怪に変身した。

(宮本武蔵、予定が変わった。私もそちらへ行く。弱らせてくれ、トドメは私が差す)

(え、は、はい。分かりました)

私は剣を構えて、変化した外人の様子を伺う。

「コロシテヤル…コロシテヤル…」

相手は刀を抜いてこちらに向けた。物の怪の身長は目測五尺強(約2 m)。

筋肉も瞬く間に膨れ上がって、最早、人の形相はしていなかった。

「コノ、『地』を司ル刀デオマエヲ叩キ切ツテヤル！」

「早っ！」

彼は、私が戦ってきた敵の中で、一番の速さで間合いを詰めて、一番の力で刀を振り下ろした。

技術は素人同然だが、彼の身体能力は尋常ではない。まさに、鬼のような力であった。

私はその攻撃をなんとか受け流して、刀を持つ手を断ち切った。あと少し反応が遅かったら、体が半分になっていただろう。

断ち切られた腕は、トカゲの尻尾のようにうねっている。

鬼はそれを拾い上げて、切断面にくつつけると、切れた箇所が繋がって元通りになった。

「これで終わりか？その貧弱な腕じゃ、俺を殺しきることはできないぞ。女のくせして剣を振るう未熟者が。胸の肉をもう少し腕にやっただ方がいいんじゃないのか？」

「うん。まあ、確かに私は女ですし、力では負けますとも。それに私はまだまだ未熟者です。うんうん：舐めてんじゃないわよ。鬼畜生！未熟者とは、お前に一番言われたくないわ！」

私は真つ直ぐに鬼へ向かった。

鬼はニヤリと笑って剣を大ぶりで振り下ろす。

私はその前に彼の足元へ滑り込んで片方の足首切った。

体の軸がずれた隙について、片手を切り、鬼が振り向いたところで、両目を切った。

「クソツ、マダマツ」

奴が無駄口を叩く前に喉を切った。

「喋らないで、あなた。私が生きてきた中で一番不愉快」

私は心臓に刀を突き刺し、各所を傷つける。さらに再生していく箇所を続々と切りつける。

「ごめんなさい。私、力弱いからさ。あなたの体を傷つけることしかできないくて、こうするしかないの。ずっと切られて、ずっと痛みに悶えていなさい」

「貴様、ワザト切断シナイデツ」

「うるさい」

また目を切ると、鬼は苦しみ、地べたを這いずり回った。

「おお、まさに怒り心頭だな。宮本武蔵」

いつの間にか、橙子さんが鞆を持って隣に来ていた。

「早く殺してください。もうこいつの声を聞きたくないのよ」

「そうか。私もだ」

彼女は鞆を開け、中にいる化け物に、傷だらけの鬼を食べさせた。辺りには、奴の持っていた刀と奴の零した血が撒き散らされていた。

「あー、本当に怒った。こんないい刀が廃れるじゃない。橙子さん、この刀もらいつていい？」

「ああ、構わん。それにしても弱かったな。新人の執行者か、それともゴミを押しつけただけか……」

彼女は早速タバコに火をつけて、煙を吹かした。

「これで、取引は終了だ。後はどうしようか。とりあえず、私の事務所まで送ろうか？」

「大丈夫です。ここで別れましょう」

「そうか、さよならだ、女の宮本武蔵。お前の話はなかなか興味深かったよ」

「ええ、私も楽しかったです。それに、色々教えていただき、ありがとうございます」

私は目の前に別の並行世界に繋がる穴を見つけた。

「ほう、それが、お前の言う、別の世界に繋がる穴か」

「はい。それでは、失礼します」

「ちよっと待ってくれ」

私は、穴の中に飛び込もうとした時に、橙子さんに呼び止められた。

「私の名前を出すとややこしくなることがあります。私の名前を出す時は、人形師、とか眼鏡を掛けた人とても濁しておいてくれ」

「分かりました！それでは！」

私は今度こそ、虚空の穴に飛び込んだ。

「さて、今日はこのくらいかな。それにしても、この部屋寒くない？」

彼女はうんと腕を伸ばした後、その手で体を摩った。

「ああ、すみません。追い払うので」

俺は懐から除霊の札を出して、壁に貼り付けた。

「え。なにそれ」

「霊を一旦追い払う札です。うちの家は、魔術で霊を使うんですよ。それなので、霊を集めやすいように細工してあるんです。寒くなつたってことは集まりすぎたんでしょうね」

「魔術で霊を使うって…君は魔術師なの？」

「はい、うどん屋やりながら魔術師やっています。歴史は二百年くらいの家ですね。その前は武家だったとか…」

彼女はほう、と言つてしたり顔でこちらを見ている。

「えっと、何ですか？」

「いやいや、魔術を使う武士って、魔法戦士っぽくていいなって」

「…本当に戦国生まれですか？」

「勿論！この知識は、様々な世界を渡ったが故の恩恵なのです」

彼女は腕を組んで、鼻を高くしていた。

「それじゃあ、明日はその様々な世界について聞いてもいいですか？」

「ええ、分かったわ。それじゃあ、また明日」

「また明日、この時間に」

## 火の巻 三日目

「大丈夫？怪我してるでしょ」

彼女は隠したつもりの俺の怪我を見抜き、指摘した。

「あ、はい。大丈夫ですよ。ちよつと魔術師同士の抗争があっただけです。すぐに魔術が効いて治ります」

「そう、ならいいけど」

彼女は俺の患部を一瞥してから、俺の家の冷蔵庫から拝借したお茶を取り出した。

「そういうえば、今って西暦何年？」

「2015年ですよ」

「ふーん、それじゃあさ。未来のこと知りたい？」

「しりたいですツツ！早くツツ！」

俺は身を乗り出すと、従者に組み伏された。

「まだ傷が治っていないんですから、安静にしてください。最近、彼女の話に聞き入りすぎです」

「えへへ、それほど面白かった？私の話」

宮本武蔵は頬をかきながら照れていた。

「いや、漂流者の体験なんて面白すぎるし滅多に聞けないぞ。ここは是非聞いておかないと」

「私の話って面白い？本当？うれしーなあ！」

彼女は頬をかく速度を上げた。

その速度は頬が赤くなるほどだった。

かきすぎて、煙が出ていたようにも見えた。

「それじゃあ、話の続きです！私は橙子さんに会った後も、沢山の世界を旅しました。アメリカに飛んでガンマンとやりあったこともあるのです」

私は、荒野を降り立った。

あたりには水がなく、茶色の岩と砂が広がっている。



飲み水はある程度準備してあるが、無限ではない。まずは水源を見つけてよう。

そう思つて適当に歩き始めた。

しばらくすると、近く足跡が沢山ある道を見つけた。

人の往来が多いということは、この先に人が集まる場所があるかもしれない。

私は道に沿つて歩くことにした。

前方から、馬に乗つたテンガロンハットを被つた二人の男たちが見えた。

彼らは私を見つけると、馬を走らせ、短銃を構えてこちらに走つてきた。

(警戒されてるなあ)

私は両手を上げて敵意がないことを伝えようとした。

彼らが叫んでいる言葉は、どうやら英語らしい。

英語圏には何回か飛んだことはあるので、なんとなく、言わんとすることは理解できた。

つまり、『動くな』ということだろう。

ドナムーヴとか言つてる気がするし。

すると、一発銃弾が私の足元に撃ち込まれた。

『動くな』とは、『不審な行動を見せるな』ということではなく、『撃ちにくいから動くな』ということらしい。

一発撃つたということは、喧嘩を売られたとも同然だ。

私は剣を抜いて、取り敢えず、投げた。

剣は弧を描いて、私を撃つた男の方へと飛んでいく。

それを奴は馬上で器用に避けて私への射撃を続ける。

対して、もう一人の男は私を撃とうとしない。

どうやら一対一がフェアだとか思っているタイプのようだ。

ならば私は、もう一人は警戒せずに、あの出会い頭に銃を撃つ失礼な奴を倒せばいい。

私は標準が銃の私に定まる前に走り出した。

早く間合いを詰めなければ負けると思った私は、銃弾が何発も撃たれる前に、刀を敵の首元にかけた。

そうすると、馬に乗っていた男は驚くと共に両手を上げて降参した。

「どうやら、私の獲物が近接の武器であったことに油断していたらしい。」

「お前、まさか、日本人か？」

すると、さつきまで無干渉を決め込んでいた男が、私に日本語で話しかけてきた。

「に、日本語？」

そこには、服装は欧米風のそれなのに、顔は明らかに東洋風の男がいた。

「いや、なぜ日本人がここにいんだよ！」

「いや、なんで日本人がここでガンマンやっているんですか！」

彼の名はジョン・マンと言って、一人でこの地、アメリカ連合国という国に来たらしい。

ジョン・マンはジョン万次郎と言われている人の渾名だ。

それにしても、この人は何をやっているのだろう。

「連合国…？合衆国じゃなくて？」

「いや、合衆国とはなんだ？」

「どうやらこの世界線では、アメリカは連合国となっているらしい。」

「いえいえ、なんでもありません。ははは」

「そうか…。それで、名前は？」

「宮本武蔵です、流浪の用心棒をしています」

「宮本武蔵!?お前があなの!?!」

ジョンさんは、驚いて口をぽかんと開けていた。

この反応だと、この世界の宮本武蔵も男であるらしい。

今まで、別の世界で会ってきた日本人に宮本武蔵のことについて訪ねたが、全て男だったことを考えると、女武蔵という存在は異端なのかもしれない。

「はは、同姓同名なだけです。ほら、宮本武蔵を目指して、みたいな」

「そうか。ん？どうしたジョニー」

ジョーンさんは、隣のアメリカ人に話しかけられて、英語で会話し始めた。

きつと、私は怪しい者ではないと説明してくれている筈だ。

ジョニーという人の表情も堅いものから緩くなっている。

「宮本武蔵、まずは謝ろう。俺の仲間が粗相しちまった」

「ええ、大丈夫です。お詫びとして食料を頂ければ、許します」

「そうか、じゃあこれを」

彼は懐から干し肉を手渡した。

「それじゃあ、これで、今度は出会い頭に銃を撃たないでつて言っておいてください」

「分かったが……あ！待ってくれ宮本武蔵。取引をしないか？」

「はい？」

彼は急に思い出したように私を呼び止めた。

「お前は流浪だろ。一時的に住む場所に困っているのなら、私が場所を提供するぜ。その代わりに協力してもらいたいことがあるからさ」  
確かに、町に拠点を置くことができれば、食料も水の確保も簡単にできる。

これは私にかなりの利があった。

「分かりました！その取引、お受けしましょう！それで、協力することとはなんでしよう？」

「最近、ここテキサスでは、夜になるとグループが発生するようになってな。その原因の調査と首謀者の排除を手伝って欲しい」

私はそれに了承して、彼に近くの町の空き家まで案内をさせてもらった。

空き家は随分と古い場所であったが、住めないほどではない。

「汚くてすまない。ここしかなかつたんだ。俺たちは近くの酒場で飲んでるから、何かあれば呼んでくれ」

ジョーンさんは、ジョニーと一緒に酒場に向かったようだ。どうやら、夜まで飲むらしい。

あの人、アメリカに染まりすぎじゃない？

いや、私のアメリカ観がおかしいのかな？

私は椅子の誇りを払って座り、深く息を吐いた。

「それにしても、この歴史の宮本武蔵も、男なのか」

橙子さんは歴史そのものが歪められている可能性だってあると言っていたし、本当に私以外の宮本武蔵が男であると決まった訳ではない。

でも、疎外感は何もなかった。

「ま、いいか」

しかし、男だとか女だとかはどうでもいい。

私は剣を極めることを望んで、あとちよつと遊ぶだけだ。

「さてと……私の今後はどうしようかな？」

私の剣は、まだあのクソ親父には届かない。

あれだけ鍛錬と実践と死線を超えても、一步も及ばない。精々、あの蹴りをもう一度浴びさせられるだけだ。

今までの経験じゃ足りない。今までの敵じゃ足りない。今までの世界じゃ足りない。

あの無二とないクソ親父に勝てるはずもない。

そういえば、並行世界の私って『二天一流』の開祖だということも思い出した。

あの無二に対して、二天と名付けたのは最高の皮肉だ。

「よし、パクるか」

たった今、私の中で、自分の流派を決めた。

流派も決まったので、暫定だとしても、わたしの目指す先を決めねばならない。

私の目標は、あのクソ親父への意趣返しだ。

無二の先、それは、まさしく零だ。

自分の話で胡散臭いが信じるしかない。たった一つの先は零しかない。

ふと、外を見ると日が沈んでいた。

この町の教会らしきところからも鐘の音が聞こえている。

そんな考え込んだのかと、自分でも驚いて空き家の外に出たると、

黒く長い袋を肩にかけたジョンさんが待っていた。

「武蔵、丁度いいな。これからグールが出る町に向かう。ついて来い」  
私たちは馬車に乗ってグールが出現するという隣町に向かった。

「まずい！武蔵！今すぐ出ろ！」

道中、馬車で揺られていると、ジョンさんの声が聞こえた。

私はすぐに馬車を飛び降りて松明をつけて、周りを伺う。

同行していた他の人達の銃声や悲鳴から推察するに、グールが襲ってきたようだ。

私の方にも、グールが大勢で生者を噛みちぎろうと迫っている。

私は大軍を切りながら、ジョンさんが戦っているところを目視で確認した。

「武蔵！生きていたか！」

「ジョンさん！どういうことですか！グールは町にいるって話でしたよね！」

「ああ、俺はそう聞いていた！だが今夜から道中にも湧くようになってたらしい！悪い冗談だよ！」

彼は馬上で銃を鳴らしながら、どこかに退路がないか探していた。

「そういえば、ジョンニーさんは？」

「あ？ジョンニーか？奴は別の仕事だ。クソ！」

私は死体から銀の弾が装填された銃を拾い、飼い主を失って彷徨う馬に跨って走らせた。

「私が道を拓きます！ジョンさん、行くよ！」

「頼んだ武蔵！」

私たちは剣を振り回し、銃を暴れ撃って、やっとの事でこの危険地帯を抜けることができた。

「ジョンさん、今から私たちがいた町に戻れますか？」

「難しいな。きつと道中で奴らに会う」

私は拾った馬を撫でながら、この事態の解決策を考える。

まず、私が旅してきた世界の法則を適用するなら、グールは死徒になりかけの動く死体、それが大量発生しているということは、死徒もしくは人間を使徒へと変える手段を持つ者がいる。

しかし、総大将を倒せばなんとかなる、とは思えなかった。もう変わってしまった者を元へ返す手段を私は持たない。だが、総大将がいたら排除すべきだ。

「ジョンさん、どうしますか？ 私は総大将を探して倒しますけど」  
私は、グールになった彼らの魂を沈めることは出来ないが、せめて請け負った仕事は果たそうと思った。

「乗りかかった舟だ。行くぜ」

「それじゃあ、道案内をお願いできますか？」

「ああ、任せろ。大学で地理関係は学んでる」

私はジョンさんの後について行って、今日たどり着く予定だった街に着いた。

「これは、ひどいわね」

息を潜めて町の見ていたが、町中にグールが徘徊しているのを見た。

私の刀には、彼らの汚れてしまった魂を祓う力はない。

でも、仕事は果たさなくてはならない。まずはあの雑魚共を切り落としながら、奴の拠点をしらみつぶしに探すしかない。

「私は行くわ。ジョンさんは今すぐ振り返って街に帰って神父さんとかに相談しなさい」

「おい、武蔵。何言っているんだ？ 俺も行くぞ。今帰ったら笑い者ぞ」

「そうね。でも守ることは出来ないから、背中が開くわよ」

「結構！」

私は近くにある家に飛び込んで、グールを全員叩き切った。

彼らは苦しそうな声を上げて、死ぬことも出来ずに苦しんでいる。

私は彼らの声に構うことなく、別の家に移った。

ジョンさんの銃声で他のグールをおびき寄せているので、私は暗殺の形でグールを切りまくった。

銃声が聞こえなくなる頃にはその町にいるグールは全て切り伏せた。

「ジョンさん、親玉はいそうですか？」

「いや、見かけなかった。そもそも、この町に親玉がいるのか？」  
「さあ、分かんないけど」

私たちが話していると、グールが教会の方から湧いて、のそりのそりと歩いているのを見かけた。

「教会が怪しそうじゃない？」

「確かに」

私はグールたちを切りながら、教会に向かって走った。

中を見ると、グールたちは地下に続く階段から出てきているようだった。

私はそこに何があると予感し、躊躇なく階段を下った。

地下には水路らしきものが広がっており、まるで迷路のようだった。

「取り敢えず、グールが出てる所を潰しますか」

私は明らかに、守るように配置された大きな三匹のグールを見て、その先が重要であると確信した。どうやら、ジョンさんは後ろの方で手こずっているらしい。

グール共を倒して奥に進むと、私は人間たちをグールに変える工場を見つけた。

肉塊に囚われた人たちが、肉が腐らされ、眼球がこぼれ落ちて、肌色が黒く変色している。

私はこの凄惨な現場に怒りを覚えながらさらに奥へ進んだ。

そして奥には、元凶と思われる人物が、私を待ち構えていた。

「えっと、死徒かしら？それとも魔術師？」

「その、両方だ」

「うわ、最悪。私が戦ってきた中で非道な奴はみんな、人外か魔術師だったけど、それを合体させちゃっているのね」

「私の計画を止める気か」

「ええ、仕事ですから」

私と奴は同時に飛び出した。

爪と刀が打ち合って、火花が散る。

奴は怪力で強引にねじ伏せるような戦いをしていた。

だから私は、迫る爪を丁寧を受け流して、地道に攻撃を当てればいい。

だが、奴の膂力はその時の鬼化けした魔術師よりも上で、受け流すのも一苦勞だった。

このままでは、体力がほぼ無尽蔵な彼に押し負けてしまう。

隙さえあれば、帯に差し込んでいる銃を撃って、効果があるかどうか試したい所だが、そんな暇はない。

今一刀になったら奴の攻撃を捌ききれない。

そこに一つの要素が、この場所に到着した。

「武蔵！大丈夫か！こんな気味悪い場所なんてとっとと抜きたいんだがな」

ジョンさんが、銃声と共にこの場所に到着した。

不意打ちの弾丸に、奴は足を撃ち抜かれ、バランスを崩した。

「ツツツ、……………」

その隙を私は逃さずに奴の右腕を切り捨てた。

どうやら銀の弾丸には効果があるようで、あの弾丸を食らった瞬間、奴の顔は完全に引きつっていた。

何というか、死徒には感情がないものだど今まで踏んでいたが、どうやら、まだ感情が残っているようだ。

「よっしゃ、洗礼された銀の弾丸は効くようだな。奴め、膝擦りむいた小僧みたいな反応してたぜ！」

奴は一度私と距離をとって、打たれた膝の回復に専念しようとした。

だが、そうはさせない。私は距離など離す暇も与えずに、奴に切りかかった。

私はさらに左腕を落として、勝負が着実に勝ちへ転がっていることを確信した。

さらに首を刎ね、頭に銃弾を撃とうとした時、死徒の口が歪んだ。私はすぐに体勢を変えて、距離を取るようになった。

「ジョンさん、私に当てても際構い無しです。奴の隙があったらバンバン撃ってください！」



「おいおい、そんなヤバいのか、あのバケモン」

ジョンさんが銃を構えながら焦り始める。

「ヤバイもヤバイ。こいつ、私が戦ってきた中で一番強いから!」

死徒の腕は再生して、足の傷跡もゆっくりではあるが埋まっている。

図体は大して変わっていないが、さっきまでの奴とは雰囲気が違う。

「いくぞ、化け物、この宮本武蔵が死ぬまで地獄で付き合ってやる!」

直後、私は吹き飛ばされ、壁に叩きつけられた。

誤魔化せる力量差じゃない。

今まで戦ってきた剣客とは違う。生物としての格の違いが、今の一瞬で思い知らされた。

こんな攻撃を防御せずに食らったらひとたまりもない。

「クソツ、武蔵!!」

彼が引き金を引いた瞬間、奴も動き出した。

地面にクレーターを作ってジョンさんの方へ飛び出した。

私はそうはさせまいと剣を投げたが弾かれた。

奴はまず、自分の弱点をつける者を潰す気だ。

つまり、奴はまだ洗礼された銀の弾が効くということになる。

私は一直線に奴へ駆けて刀を振り下ろす。

彼は私が『ジョンさんをここで失っては勝てなくなる』と考えていると思っっているだろう。

そこに隙がある。

奴は私の刀を掴み、どこかへ振り回そうとした。

私は掴まれた刀を離して何処かに投げさせ、拳銃を構えた。銃の心得はないが、この間合いなら何発でも当てられる。

引き金を何度も引き全弾を奴に命中させた。

奴の動きは完全に鈍り、鋭い爪は消えていって、消滅までの一歩を歩める筈だった。

油断していた私の頬に拳が飛ぶ。

六つの弾丸を食らっても奴は生を繋ぎとめていた。

私は何とか踏み止まって、奴の顔に殴り返した。しかし、このまま殴り合いという訳にもいかない。

腕力はあちらの方が圧倒的に強い。あと二度も同じ拳を食らったら、私の頭蓋骨が完全に破壊される。

かといって、今から剣を抜ける余裕もない。そんなことをしていたら、その隙に殴り殺される。

「武蔵！」

ジョンさんが何かを投げてからこちらを呼んだ。

彼はきつと、何か私が優位になるものを投げたはずだ。

それが此処に届くまで、あと一発の拳が私に飛んでいる。

私は持っていた拳銃を鈍器として、奴の拳に叩きつけた。

そして力負けして手が離れ、拳銃は形が歪に曲がりながら、どこかへ飛んでいく。

ジョンさんが投げたのは鞘から抜いた刀だった。それを確認すると、刀を掴んで奴の腕をもう一度落とした。

「それはジャパンからの輸入品で、『水』を司るとされている刀だ！使え！」

「オーケー、ありがとう。ジョンさん。これで、切り刻める！」

しかし、私が切ろうとした瞬間、奴は後ろに飛んで切られることを回避した。

この隙を私が逃してしまった理由はただ一つ。

この死徒と私の間が、大きな肉壁によって阻まれたからだ。

奴はグロテスクな肉の壁で自身を囲んでいた。

「ジョンさん、試しにこれ撃ってみて」

「おう」

打ち出された銀の弾は、壁にのめり込んで、そのまま飲まれてしまった。

どうやら、弱点である銀の弾丸さえも傷もなく飲み込んでしまう壁のようだ。

奴はこのまま泣き寝入りを決め込むつもりだろうか。

私は投げた刀たちを拾って壁の前に立った。

「ジョンさん、私がこの壁を壊すから、その間に奴にその弾丸で頭撃ち抜いてもらえますか？」

「ああ、俺の腕ならケツの穴だろうが、眉間だろうが撃ち抜いてやるが、武蔵はこの壁を破れるのか？」

「ええ、私の閃きは結構当たるよ。いいから見てて、そして必ず撃ち抜いてよ」

私は刀を鞘に入れ、集中する。

——南無、天満大自在天神。

仁王が浮かぶほどの剣圧を、奴とそれを守る壁にぶつける。

「仁王俱利伽羅、小天象」

剣を抜いて、たった一つの攻略策を繰り出す。

「ゆくぞ、——劍豪抜刀」

「——伊舎那、大天象!!」

渾身の一撃で、私は肉壁を、飲み込ませる間もなく断ち切った。

そして、中から執念だけで身を再生させようとする死徒が露わになった。

「ジョンさん!!」

「言われずとも!」

彼は魔術師の頭を撃ち抜いて、完全に殺した。

奴を囲んでいた壁の残骸が崩れ落ち、奴自身も消滅した。

「かっつっつっつっつっつた~~~~~」

私は勝てたことが嬉しくて、思いつきり叫んだ。

一気に力が抜けて、その場にストンと座る

「おい、武蔵。喜んでいるところ悪いんだが…」

ジョンさんが気まずそうに私の肩を叩く。

「どうしたんですか？ジョンさん」

「ここ、崩れるみたいだ」

「嘘お」

私達は急いで今にも崩れそうなほど軋む地下水路を抜け出した。

町から抜け出した頃、ジョンニーさんが人を連れて迎えにきてくれた。

ジョンさんとジョニーさんはハイタッチしたりして、英語で無事であることを説明してくれているようだ。

私は彼らにつられて、元いた町に帰ることができた。

そして、その日は、酒屋で飲み明かすことになった。

ジョンさんによると、飲み放題だそうなので、わざと高価そうな酒を飲んでやった。

私は酔潰れる前にジョンさんに聞きたいことが二つあったので、彼の席の横に座った。

この相談の内、二つ目は完全に酒の勢いであつたことを覚えてい

る。

「ジョンさん、この刀は？」

「え？水を司る刀か？それはやるよ。お前は取引以上の働きをしてくれたからな」

「ありがとうございます。それと、もう一つ。私の話を聞いて頂けませんか？」

「ん？どうした？」

「私って、別世界の宮本武蔵なんですよ…」

「ほう。え？なるほど」

彼は半分分かっていて半分分かっていなさそうな顔だった。

だが、私は彼の理解などに構っていないかった。

「他の世界の宮本武蔵はみんな男なんです。いや、男が良い、なんて話じゃないんですけど、私だけ、他の宮本武蔵と違うんです。私は世界を沢山超えて、その事実を突きつけられました。…：…どうなんでしょう。私は宮本武蔵として間違っていると思いますか？」

「すまん、お前の質問にはしっかり答えるんだが、まず、他の世界のジョン万次郎について知っているか？」

「まあ、話くらいなら聞いてます。真面目で前向きだった。とか、勤勉だったとか」

「じゃあ、アメリカにずっと居たいと駄々こねてテンガロンハットを放さないジョン万次郎はいるか？」

「私が聞いた中では、いないです」

「そうか。でも、俺はそんな事実を知っても、自分はジョン・マンツマリジョン万次郎だと言い切れるぜ。どうしてかって？俺がこの世界のジョン万次郎そのものだからだ。他の世界線になんてビビることはねえ。そもそも、その他の世界線のジョン万次郎の性格が真面目なんてどこから聞いた？他人から見た記録だろ。その歴史が違っている可能性もある」

彼は酒のせいか、大きく身振り手振りをしながら熱弁していた。

「すまん、これ以上広げたら、朝まで語っちゃう。結論だけ言おう。お前が宮本武蔵そのものなら、宮本武蔵と恥じることなく名乗れ！」  
「なるほど……」

歴史が違う可能性。

これは橙子さんも言っていた。

確かに私は、他の宮本武蔵に翻弄されていた。

宮本武蔵ならこうあるべきだ。宮本武蔵ならこれほどの強さのはずだ。

そんなプレッシャーが、他の世界の宮本武蔵を知るほどに重くなっていた。

ただ、説得しやすいという便宜上で使っていた『ただの同姓同名』の文句が、私は本当の宮本武蔵ではないと逃げる為に使っているようになったくらいに。

「それじゃあ、俺はあっちの席に行ってくる」

ジョンさんはジョッキを持ちながら、英語で大きな声を出して、他の席に向かっていった。

私は今でも酔っていたが、さらに飲みたい気分になった。

もう、私はどうすればいいのかわからなかったからだ。

今まで考えることを放棄してきたが、いざ考えると、やはり辛いものだった。

「マスター!!それ!!」

(あ!!日本語通じないんだ!!)

私が焦っていると、通りかかった人が私の欲しかったお酒を頼んで

くれた。

「隣いいですか?」

巫女服を着た女性が、私の隣に座った。

「いいですよ。全然」

「ありがとうございます。同じ女の人がいて良かったです」

彼女の佇まいにはどこか暖かさがあった。

「えっと、貴方は?」

「私はあなたと同じ流浪の者です。宮本武蔵さん」

「へー、地変だったでしょう。マジで」

「はは、確かにそうですね。マジで大変でした」

彼女の放つ雰囲気はとても柔らかいもので、このむき苦しい男が集まる酒場でも、この場所だけは、自分を曝け出せて、とても話しやすかった。

「私は聖堂教会と協力して、彼らに洗礼された銀の弾丸を支給したんです」

「へー、だからあんなに沢山の弾があつたんですね。でも、あの…教えとか違いますか?」

「そこは目標が同じだったからです。彼らもあのグール生産工場を止めたいと思っていたので、簡単に手を組めました」

「それにしても、ここに来て巫女服ということは、あなたも日本人ですよね!」

私は確認するように聞いた。

「はい。勿論ですよ」

私と彼女の話は、中々に盛り上がってしまい。

一刻も話せば、親友のように打ち解けてしまった。

そして、私は酒のせいもあってか、彼女に今胸中に抱えている問題を、いつの間にか打ち明けていた。

「なるほど、貴方は自分から神隠しに遭う体質みたいですね。そして、他の世界の自分を見て、自分が何なのか分からなくなってきたんですね。分かります」

「分かるのおおお…。ほんとさあ、観音様には感謝しているけど、そ

こんところどうにかして欲しいわよね〜」

「私は誇りを持ってばいいんだと思いますよ。私はこの世界代表の宮本武蔵だって」

「誇り、ですか。ゴミじゃない方の」

「ゴミじゃないですよ」

誇りか、と私は今までの自分の行動を思い出した。

しかし、誇りになるようなことは思い出せなかった。

私は誰かと取引してばかりだった。

人に感謝されることはあっても、自身の正義感から働いたことはない。

「私、そんな誇れることしていませんよ」

「ネガティブになっちゃダメですよ。人は良い事をしたから誇りを持つのではないで、自分のやったことが満足できたから誇りを持つんです。貴方は自分の行動に満足しますか?」

「満足……しています」

ああ、どんな汚い人生と罵られようとも、私はこの生き方に満足している。

「なら結構。貴方には誇れるものがあるんですから。それを誇りなきいい」

そうだ。自分の人生は素晴らしい物だと胸を張って言えずに、究極の一に勝てる道理などない。

「ありがとうございます。巫女さん！参考にします」

「どうも。ストレンジャーの貴方の一助になれて、私も嬉しいです」

きつと、他の歴史の偉人たちもそう言うに違いない。

他の世界なんて、気にする必要はないのだ。

私は憎つき新免無二斎を親に持つ宮本武蔵だ。

名乗る過程が適当だったとしても、真正正銘の宮本武蔵だ。

さて、宮本武蔵がゲシュタルト崩壊する前に、決意しよう。

私は、宮本武蔵だ。

そうしてその日は飲み明かし、私はこの町を出た。

私はこの日、ようやく自らを誇りを持って『新免武蔵守藤原玄信』だと、『宮本武蔵』だと名乗れるようになったのです。

「長くなっちゃったわね。今日はここまででいい？」

「大丈夫ですよ」

一度時計を見て遅くなっていることに驚いた。

俺はどうやら、彼女の話にかなり聴きこんでしまっているらしい。

「じゃあ、私が出会ったクソ親父に迫る実力者の話は明日にしましょう。さらに私がお天道様のようなだって言われた意味を理解するお話付きです」

「分かりました。それじゃあ、また」

「ええ、また明日、この時間に」



## 風の巻 四日目

「そういえば、大丈夫なの？」

俺と従者は時間通りに彼女の部屋に入っていると宮本武蔵さんが話しかけてきた。

「どうしたんですか？」

「君って学生よね？学校に出なくていいのかなって」

「大丈夫ですよ。家の用事で少し休んでも、進級に支障がないようにはしているのです」

「なら結構、日頃から勉学に励んでいる証拠ね。一道が万芸に通じます。これからも頑張ってください」

「はは、そうですね」

「それじゃあ、昨日の話の続きです。私は、ある世界の道端でとある人に会ったのです」

「私はある世界の相模の四阿で、ある爺さんを見かけた。

この人はかなりの実力者であると、一目見ただけで思った。

家紋を見るに彼は柳生家の人間。

お遊戯のオトメ流と聞いたことがあるが、その実態を確かめたくなった。

一目惚れ、という言葉がある。

そのバトルジャーキー版と思ってもらっていい。

強い人を見たら

『この人…強い！戦いたい！』

と頭の中が殺し合いになってウズウズする。

旅の中でそんな経験が何度もあったが、あの人と会った時はそのウズウズが大きかった。

きつとこの人はクソ親父に迫るほど強い。

そして、鯉口で何気なく誘ってみると、次の瞬間には私の首元に刃が迫っていた。

「嘘でしょ！白昼堂々で剣を抜く人がいる!？」

私は驚いたが、ギリギリのところまで剣を抜いて、何とか首が切られることを阻止した。

「ふむ。白昼堂々で誘ったのは貴様であろう」

私はそこから何とか彼の一撃を二度も避けて、別世界へと逃げるこ  
とができました。

そして出会ったのです。私のお……

「どうしたんですか、急に黙って」

俺は高らかに何か言おうとした武蔵さんが、動画が止まったように  
停止したのを疑問に思った。

彼女は俺の疑問も聞こえていないようで、停止したままボソボソ何  
かを言っていた。

しばらくして彼女のボソボソが終わると、しっかり正座して俺の目  
を力強く見た。

「今から私は語弊を鑑みないで言葉を発します。その言葉を聞いたら  
容赦なく思ったことを言ってください。なんとかしてその語弊を解  
きましょう」

「はい、どうぞ」

彼女は唾を飲み込んで、口を開けた。

「…私は、その…私のお天道様に会ったのです」

「なんですと!？」

思わず、俺の従者も一緒に反応した。

「というか、誤解して欲しくないなら、恥じらいながら言わないで欲  
しい。」

「だから。いい？君たちが思っているような色恋沙汰ではございませ  
ん！いい、あの子は恋愛感情というよりは、保護、そう！あの子は、た  
だの、ただの、ただの保護対象です！」

「それはそれで酷い！」

「あゝ。どうしたら伝わるのお！」

俺は慌てる彼女をよそに、一度頭を整理してから質問した。

「えつと、つまり、その子に入れ込んでると」

「そう！それ！多分憧れもある！私が宮本村を出て行く時に、私のことをお天道様だって言ってくれた村人の方々がいるって言ったでしょう。きつとあの人達の感情と同じだと思う」

「なるほど…その人の生き様が、」

「ええ。」

あの子は、自分から精一杯『正しい人間』になりたがる正義の人でした。

私のやったことは、おおよそ正義の為の行いとはいえず、正義を志して戦いたい、なんて思ったことはないけど、それでも、正義のために正しい人間であろうとする人が大好きだった。

その子とは、一度鬼ヶ島出会って、いくつか世界を飛んだ後に再開しました。

私はその世界で、生涯最高の相手と戦うことになるのです。

その世界は、ストレンジジャーの天草四郎時貞が、日本中を渦中に陥れようとする世界線でした。

そこでは大勝負の連続だったわ。一戦目は宝蔵院胤舜殿。操られた後は、ランサー・プルガトリオとか言ってたっけ。良い男だったのですが、宿業というものを埋め込まれて操られてしまい戦うことになりました。流星、宝蔵院の槍術。相当に苦戦しました。

二戦目はアーチャー・インフェルノ、骸は巴御前さん。彼女は弓をよく使うから相性は良いとは言えませんが、なんとか勝てました。鬼の膂力はもう懲り懲りです

三戦目はアサシン・パライソ、骸は望月千代女。甲賀三郎の呪を引き継いでいた忍びね。でも彼女、宿業を埋め込まれていなかったらかなり面白い性格してるのよ

四・五戦目はバーサーカー衆合地獄、骸の名は酒吞童子そしてライダー黒縄地獄、骸の名は源頼光。生粋の鬼の方は、あの子に同行した

小太郎君が相手をしてくれたのですけど、いやあ、黒縄地獄は強かった。骸が源氏の棟梁ですし、当然といえば、当然か

六戦目はキャスター・リンボ。彼、顔は良いのよね。顔は。趣味じゃないけど。また、つまり、顔だけでいいタイプの根っこから先つちよまで全部悪党なヤツです

七戦目はセイバー・エンピレオ、これ、私が鬼ヶ島に来る前に戦った柳生家の、柳生但馬守宗矩さん本人ね。彼のおかげで私は奥義の開眼に目覚めたのです

アメリカ連合国の時ぐらいは形にはなっていましたけど、完全に完成したのはあの一戦でした。そして、その後、漂流者の天草四郎と戦い、我が宿敵、佐々木小次郎と戦ったのです。結果は勝ち。しかし私は力尽き、一度目の生を終えました。

あの世界は、私にとってかけがえのないもの。

私ってかなり出会いに関して恵まれてて、一時的にでも一緒にいてくれた人たちはみんな親切に接してくれました。

そして私は死に、英霊となつて、第二の生というやつを始めました」彼女は気持ち良さそうに言い切つて、手元にある水を飲んだ。

「ここで、聞いておきたいことがあるのです。私のここまでの人生を、貴方はどんな風に感じた？」

「俺は、貴方の人生はとても魅力的だと思いましたよ」

嘘偽りなく言った。

「ありがとう。それじゃあ、話の続きです。私は英霊となり第二の生を得て、色々な世界を飛びました。その中の一つに、話に乗せられてスキーさせられる世界線があるんだけど……」

時代は現代。季節は雪が積もった真冬。

吹雪に巻き込まれて別の世界に移ってしまったらしい私が、道端を歩いていると、とある隻眼の剣士に会いました。

「お、貴方良い剣の腕してますね？」

唐突すぎて、切り合いの誘いではなく新手のナンパかと思った。

しかし、拡大解釈をすれば剣客同士の勝負の誘い合いも、ナンパと呼べるかもしれない。

「ほう、そう言う貴方も、良い腕してますね」

私はベルを鳴らすみたいに鯉口を鳴らしまくった。

そして白昼堂々、私たちは剣を競い合った。

正直、顔も好みでした。というかあの顔、誰が見てもイケメンだと答えるタイプの人です。

しかも剣から伝わる気迫も十分で、きつと好青年なんだろうなとも思いました。

あともう少し若ければ……

でも、私はちよいワルもイケる口です。

え、関係ない？そう……

その苛烈した勝負の真つ最中だった。

「何をしている!? 十兵衛!」

遠くの方から、誰かの声がした。

その人物はあろうことか、煙を上げてスキーをしながらこちらに近づいてきた。

スキー板の後ろにジェットみたいなものがついてる気もした。

雪がそこらに飛び散っているのが見えた。

「ああ、すいません。雪下さん。強そうな剣士を見つけたので」

十兵衛と呼ばれた彼は、意識が高そうなメガネを掛け、更にスーツ姿でスキー板を装着している男に驚きもせずには答えていた。

いや待て。

十兵衛という名前と、そして白昼堂々剣を抜く程のバトルジャーキーさ。

別の世界とはいえ、性格が似通っていることもある。

まさか彼は……

「あの、名前を聞いてもよろしいですか?」

私は少し期待をしながら名前を聞いた。

「ああ、僕の名前は柳生十兵衛です」

「お前、何故、名乗っているんだ！」

十兵衛君が名前を名乗ると、スーツの人が大きな声で怒鳴り始めた。

でもこの人、さつき十兵衛と大声で言っていたような気がする。

「いや、雪下さんだつてさつき大声で言ってたじゃないですか」

十兵衛君もすかさずそこを突く。

「…そこはいいんだ」

真顔でそんなことを答えないで欲しい。

少しは悪びれて欲しい。

「そんなことより雪下さん。この人をちよつとチームに入れてみませんか？」

「え、どういうこと、十兵衛君？」

「なるほど、貴様と切り合いで互角であるならば、検討してもいいな」

「ちよ、ちよ、ちよつと待たさう！どうということ？私抜きで話を進めないで〜！」

私が止めると、十兵衛君が私の前で手を合わせた。

しかし、まだ目は人殺しの目であり、まだ勝負は決まっていないと言っている。

どうやら彼は、まだ私と戦いたいらしい。

「お願いします。協力してください！報酬も用意します」

いや、別に、断るとか一言も言っていないし。

こんな美少年にお願いされたら断るはずもないですしね！

あの子に会ってから、自分から正義を唱えてみるのも悪くないと思えるようになりましたし、ここは、『報酬なんていらぬサ』みたいなキザな台詞を言っちゃおうかな。

待って、今の心の声、自分でも引いた。

はは！例え騙されても何とか生き残ってやり返すのが二天一流！

とりあえず、彼とはもつと戦いたいし話には乗ろう！と思った。

「分かりました！その依頼、この宮本武蔵の名にかけて、お受けします！」

連れられた先で、私は彼らのチームについて説明された。

その名も、チーム『ロシアン柳生』。

秘密裏に結成された日本政府のエージェントらしい。

スキー板で陸上水上雪上なんのその。

ジェット付きスキーですぐに駆けつけ、日本の恒久的に北方方面を守る防衛集団。江戸初期からの結成で由緒正しきエリート集団、らしい。

私は彼らのアジトに案内され、会議室のような場所に入った。

その部屋には偉そうな人たちが足を組み、手を組み、私を試すような目で見ていた。

「緊急集会と聞いて来てみれば、なんだ十兵衛、小娘を連れて来たのか」

「我々はそれほど暇ではない。手短かに言ってくれ」

他にも、ご老人たちの目たちが痛いほど刺さる。

この人たち、きつと大真面目だ。

「はい。この人は新人です」

「」「ほう?」「」

席に座る全員が同じタイミングで声を発した。

「どんな選考基準だ? 実力か、頭か」

「実力です。僕と互角なほどのね」

「他には?」

「彼女は、所感ですが、相当な経験をしています。これも我々に役立てられるものかと」

「なるほど、十兵衛がそこまで言うなら入れてやろう」

「どうやら、私のロシアン柳生入りが決まったようだ。」

組織に所属してしまっただが、あの虚空の穴があつたら入って逃げようくらいの軽い気持ちだった。

「十兵衛君すごいわね。あんな頑固そうな老人たちを説得しちゃうなんて」

「いえいえ、彼らは言動以外は意外と柔らかいんですよ。百円で買え

るゼリーくらいよそ者には柔らかく、優しいですよ」

「へー、そうなんだ」

彼は『装備室』と書かれたプレートがある部屋の前に立った。

「装備を支給します。まあ、ただのスキー板とスキーウェアなんですけどね」

ジェットが付いているスキー板は、ただのスキー板ではないと心の底から思った。

私は三日ほど訓練を積んでスキー板を完全に乗りこなせるようになった。

そして、私が警備に出る日になった。

目的地に向かう同じへりには、私の他にも十兵衛君と雪下さん、他二名が乗っている。

「いや、すごいですね。武蔵さん。こんなものをすぐに慣れちゃうなんて」

「ははは、皆さんが教えるのがうまいからですよー！」

すると、十兵衛君はあの時の、勝負の目に戻った。

「そうそう武蔵さん、あの場所はややこしい場所ですって、色んな意味でグレーゾーンなんですよ。ですから死人が出ると面倒ですってね…：そこで出た死人は、誰にも迷惑がかからないように、痕跡を残されずに処理されるんですよ」

「へえ……」

私たちが互いに穏やかに笑うと、雪下さんが口を挟んだ。

「貴様ら、殺し合いなんて止めろよ。身内が殺し合いの喧嘩だとか最悪の面倒ごとだぞ」

「は〜い」

私たちは目的地に着き、身体を戦闘用に切り替えるために深呼吸をする。

「さて、始めようか。宮本武蔵、天下第一の剣豪の腕。見せてもらおうか」

「ええ、もちろん。散々物語の主人公になる天下の新陰流の天才剣士



の腕前、楽しみですわ」

そこに慌てて雪下さんが走ってくる。

「お前たち！何をして…」

「じゃあ僕はここにしよう」

「じゃあ私はここで」

武者震いを抑え、肩の力を抜く、完全にリラックスして、私たちは釣り糸を垂らし始めた。

「何をしてるんだ。お前ら!!」

「え、なにつて、釣りですよ」

——これは、自分が信じる刀（竿）を使い、釣れる魚の量を競う真剣勝負だ。

「この季節だと…何かいるっけ、十兵衛君」

「知りません、ワカサギくらいじゃないですか。秋のシーズンは過ぎています」

「いやいやいや、仕事をしろ。お前らは一体なにをしに来「よし！最初から本気を出すか！見よ！我が二天一流の代名詞！二刀流（竿）だあ!!」

「なんだとお!?」二つの竿を使いこなせるだど!?流石の器用さだ！これならば幾万の戦法に対応できるだろう！だが、こちらにもそれ相應の技があるのを忘れないで欲しい！これが、劍（竿）禅一如（偽）だあ！」

私は驚愕した。

これはまさしく、別の世界の彼の父、柳生但馬守宗矩の技に酷似していた。

「なるほど、手に持つ竿は一本。しかし、無念無想の域に入ること、精神状態を強化し、一の太刀にも匹敵するその一刀で、かかった魚、いや、かかりかけた魚をも強引に針を刺して釣る技か!!」

「いや、劍豪ども！仕事しろよお！」

私たちは三十分間、互いに神経を尖らせて、竿、又は海と対面した。「クソオ！何も釣れねえ!!これもみんながスキーでその辺飛ばしまくるからだ!!」

「当たり前だろうが!!仕事しろ!!」

雪下さんは私たちに思いっきり怒鳴った。

「待つてくれ。雪下隊長」

その時、私たちを庇う者がいた。

「相手はあの剣豪、宮本武蔵です。競いたくなるのは、剣の道に生きる者として当然です」

「いや、俺にはあの剣豪たちはボケ倒しているようにしか見えないんだが…」

「お、どうした笠兵衛」

十兵衛君は、雪下さんを諫めようとする大柄な男に手を振った。

「十兵衛様、お願いがございます。私めを宮本武蔵と戦わせて頂きたい！」

彼は寒い大地に頭をつけている。

「紹介しましょう、武蔵殿。彼は『ロシアン三兵衛』のうちの一人、柳生笠兵衛だ。こちらからもお願いする。どうか、彼の挑戦を受けて欲しい」

「はい！勿論その勝負受けましょう。それで、どんな勝負でしょうか」

「はい、それは…」

金網と炭、マツチ、その他諸々の準備して私たちは互いに対面した。

「焼肉…ですか…」

「はい、こちらには、数は少ないですが、様々な牛肉を準備させて頂きました。これから雪下隊長に、次々にこれらの肉を入れさせます」

「なるほど、どちらが多くベストな焼き加減の肉を取れるか、という勝負をするわけね」

「ご明察です」

「でも、ベストな焼き加減、というのは生焼け、こんがりと好みが変わるはず、そこはどう決めるの？」

「ここは、彼女に決めてもらいましょう。三兵衛の一人、柳生七兵衛に！」

海の方こうから、仕事をしていたぶかぶかのコートを着ている女の人が到着した。

「何で…でしょうか…」

「七兵衛、確かお前はこんがり焼けた肉が好きだったな。お前にこ

の勝負の審判を頼みたい」

「…分かりました」

彼女は私と笠兵衛が戦うルールの説明を聞いた後、大きな皿を前に置いて簡易イスに座った。

「いざ尋常に…勝負!!」

肉が続々と投下される。

そういえば、雪下さんはもう突っ込まずに無表情に肉を網に乗せている。

まさに無念無想の境地だ。

私は両手にトングを持った。

しかしまだ肉は焼けない。私たちは歓談をする余地があった。

ふと、私は相対する彼を見ると、彼は驚愕のモノがあった。

「それは…トング?」

トング、とは食べ物を挟んで掴む道具だ。

焼肉用のトングは特殊でピンセットのような形状をしている。

だから、私の両手には大きなピンセットが二つある。

だが違う。

彼が持つのは、ただのピンであった。

彼は、ピンで肉を取るつもりか——。

そして時は来た。

肉が焼ける瞬間、同時に動き出す。

私はあらゆる手を使って肉の焼き具合を確認し、皿に盛る。

「な……………」

私は彼の斬新な肉の取り方に驚かされた。彼は手に持つピンで焼けた肉たちを槍の要領で刺し、皿に盛っている

最高速度は私のトング捌きよりも上だ。

「まさかこの境地、貴方も指をかけてるといふの…」

「ええ、十兵衛様には及びませんが…」

私たちは、一心不乱に肉を取り、互いを牽制し合い、肉を積み上げた。

高速極上焼加減肉争奪戦は私が勝利を収めた。

しかし、一分の油断も許されない勝負だった。  
流石天下の柳生。配下でもこれほどの腕を持っているとは思わなかった。

「次は…私も…よろしいでしょうか」

次は七兵衛ちゃんが勝負を申し込んできた。

勝負の内容は早食이었다。

彼女はさらに追加で肉を網を置いて、私の前にストーンと座った。

「この勝負って、七兵衛ちゃんに不利じゃない？」

さっきまで彼女は私たちが焼いた肉を審査をするために、肉を食べていたのだから不平等だと思った。だが、彼女は余裕そうな笑みさえ浮かべている。

「お言葉ですが、私にとってはこれで平等というものなのです」

「はい、彼女は相当な大食い。いくら劍豪の宮本武蔵とはいえ勝つのは難しいかと」

十兵衛君は私の對抗意識を扇動する。

「よくしのつてきた!!ひたすら食べてやる!!」

少しの間、二人の女は肉を貪る肉食獣となった。

新免武蔵はあらゆる手を使って、肉を胃に押し込む。

柳生七兵衛はまるで掃除機のように肉を胃に流し込む。

勝負はギリギリ私の勝利だった。ただ、吐いた。

彼女の胃はまるでブラックホール。私の会ってきた人物の中で、早食い、大食いに関しては彼女に勝てる者はいない。

恐らく、彼女が胃に何も入っていない状態でこの勝負を始めていたら私が負けていただろう。

「クソお。まだ気持ち悪い…」

「そういえば、どうしてお前らは剣以外で戦っているんだ？」

その時、雪下さんが今更疑問を口にした。

「「だって、ダメって言うから」」

雪下さん以外のメンバー全員が言った。

「なんか…すまん」

「それじゃあ、剣で戦っていいか？雪下厳兵衛」

「やめろ！その名前で言うのはっ！」

「え、兵衛って名前がついているってことは」

私は表情を崩す雪下さんを珍しく思いながら追求した。

「そうです武蔵殿。彼は『ロシアン三兵衛』の唯一の外家の人間です。それで厳兵衛。戦っても、いいよな」

かなり考え込んだ後、雪下さんは、十兵衛君の頼みごとに了承した。

「決して殺し合いはするなよ。いいな」

「よっしゃ！行くぞ！武蔵殿！」

「応とも！」

私たちはスキーを付け、水面に向かってジェットエンジンを向けて射出した。

陸海空の全環境での戦いはとても新鮮な経験で、私たちは勝負に熱中し過ぎて、迫る吹雪に全く気づきませんでした。

戦闘馬鹿です。すいません。

私たちは吹雪に巻き込まれ離れ離れになってしまい、空中で時空漂流<sup>れいしふと</sup>、私は別の世界に飛ばされてしまった。

「さて、今日の話はこれくらいにしましょう…か」

彼女は窓を見ながら終わりを告げた。

彼女は1日後には消滅する。

サーヴァントは消滅しても座に帰るシステムだ。

だから彼女のようにそれほど深く悲しむことはないと思った。

「それじゃあ、また明日」

「うん、また明日、この時間で」

## 空の巻 五日目

「……待ってください」

彼女の話を最後まで聞いた俺は苦笑した。

世界はここまでも残酷だと思いついた。

「つまり、貴方は役割を果たしたから捨てられるってことですか？」  
「多分ね。その場所の詳細は分からないけれど、切るべきものを全て切り、行くことのできる世界を失くした私は、どこかに放り込まれるのでしょう」

消えかける彼女の足元を見て、彼女の消滅がただのサーヴァント消滅ではなく、もっと恐ろしいものであると実感した。

「逃げたくならないんですか？ どうかにかしようと思わないんですか？」

俺は彼女に聞いた。だした。

つまり彼女はこの五日間、転移に対する対策を何もせずに悠々と自分の過去を話していたということだ。

彼女はこうしてそこまで落ち着いていられるのだろうか。

「うーん。こればかりはしようがないからね。どうやら私がこうなっちゃうのも、世界の意思みたいなものらしいし」

それで、その処置を受け入れるということか。

「そんな…」

「ああ、これって『生きるの飽きた』とかそういう諦観的な理由じゃないわよ。不可逆な事態だから受け入れるしかないってこと。だから出来るだけ悔いがないように過ごしてきたわ。私は私が轍を残した全ての世界で悔いのないよう努めてきました。おかげで心残りは後一つだけです」

彼女は言葉を失う俺を見て言葉を訂正した。

「もしも、抗えない事態になったら、それを認めなければその不可逆に雁字搦めになって身動きを取ることができなくなるということだろうか。」

「本来、この世界にも来るはずがないんだけどね。ほら、私が漂流ドリフトをす

る時って、星みたいな光が見えるって言ったじゃない。あれって私が行ける世界の数を表しているみたいで、別の世界に行く度に数が少なくなっていくっていったの。そしてあのオリュンポスが最後の世界、そう思ってた」

「だけどここの世界が最後だった、という訳ですね。……それでその、もう一つの心残りってなんですか？」

「心残りね……」

彼女は窓から都会の光に負けず輝く一等星が雲で隠されていく様子を見た。

「あの子、そしてあの子のサーヴァントのこれからを見たいなって。うん、これ完全にわがままなんだけどね」

「そうですか。たしかにわがままですね」

彼女の姿はみるみる消えていく。

「最後に、誰かに記憶を預けられて良かったです。それじゃあ……」

別れを言おうとした彼女はぽかんと口を開けた。

そして、少しづつ青ざめていく。

「私、君の名前聞いてない！」

「そういえば、そうだった！」

「馬鹿ですか、貴方達」

俺の従者が半ば呆れていた。

「あ、俺の名前は平田武揚です」

「うん。いい名前じゃない。それじゃあ、君に私の記憶を預けます！」

こんな女の宮本武蔵がいたと、覚えておいてください」

「はい。それで、あの……言わずらいことなんですけど」

俺はこの五日間言いそびれていたことがあった。

「何？この際だから、言っただけ早く！」

「この世界の歴史に、宮本武蔵なんて人は、記録に残っていないんですよ」

「へー……嘘でしょ!?!(´;ω´)」、日本よね!?!」

「はい、日本です」

「うん。まあ、中にはそんな世界線はあるわよね……え?」

女武蔵は信じられないと言わんばかりの驚いた表情をした。

「どうしたんですか？」

「いやいや、何でもないわ。今度こそ、じゃあね！」

「はい、お元気で、宮本武蔵さん」

彼女は輝かしい笑顔を浮かべて、うつすらと消滅した。

「アサシン、話があるんだけど、ちょっといい？」

「何でしょうか、マスター」

取り残された俺たちは、作戦会議に戻った。

「この聖杯戦争、俺たちは運良く生き残ってきた。明日くらいには決着がつくだろう」

「確かに、明日に残り全ての勢力が激突すると思われれます。それで？」

「奥の手を使って、この戦争に勝って、彼女のわがままを叶えよう」

「マスター、それは…」

アサシンは口をつぐむ。

確かにあの奥の手はいずれ来る結末を早めることになる。

「覚悟の上だ。手段の見て見ぬふりはできない」

「どうしてマスターは彼女にそこまで執着するのです。元々、彼女の話を聞いて消滅まで待ったのは、彼女の霊基を活用するためでしょう」

「ああ、そのつもりだった。でも話を聞いていたら気持ちが変わった。そもそも、彼女の話を聞く限り、消滅とは言っても霊基が弱まる訳じゃないからな。利用はできないよ」

「しかし、アレはマスターの一族をここまで陥れた厄災なんですよ」

「でもいつか俺はアレを手にしていただけと思う。時期が早まっただけだよ」

「何故わがままを叶える気になったか、理由を聞いてもいいですか？」

彼女は真剣に、こちらを見据えた。

その手には暗殺用の短刀が握られている。

本当に殺すつもりはないだろうが、彼女のその態度は、真摯に答えろというメツセージだろう。



「ああ。結論を言うと、彼女は俺を救ってくれたんだ。その恩返しがしたい」

「とうとう?..」

「彼女は自分の運命を悟っていながら、この五日間、自然体で快活に笑って彼女の旅路を語ってくれた。俺って許可がないと部屋に入れないほどネガティブだからさ、どうしても破滅的な未来を怖がって、その事で頭が一杯になるんだけど、彼女は結末さえも受け入れて、『なら道中を楽しもう』って姿勢だったんだ。本当に、憧れた。だから俺も破滅を恐れず受け入れて、ついでに彼女へ恩を返そうと思ったんだ」

アサシンは俺の話を聞くとゆっくりと頷いてくれた。

「マスターがそこまで言うなら、私は止めません。私は貴方のサーヴァントですし」

俺たちは地下の工房へ移った。

そこには、呪いと霊を集める細工の正体がある。

魔剣、テイルフィング。

黄金で彩られたこの剣は、持ち主に抜いた本人に必ず勝利を与え、三つの願いを叶える代わりに、滅びを与える剣だ。

平田家の一族はこれに運命を翻弄されながらも、これを利用して霊や呪いを集め、魔術の道具としていた。

「しかしマスター、彼女を幽閉したのが世界の意思ならば、道理を変えようとするれば、カウンターによって阻止されるかと」

「確かに、カウンターにやられる可能性はある。でも、抜け道がない訳じゃない。そもそもアレらに見つからないようにすれば、バレないよ」

「それも、相当に難しいと思いますが」

「少しだけ彼女に報告に参上するくらいはできると思う」

俺は黄金の剣を手を取った。

所有権は俺に移され、不可避の呪いが体を侵食する。

もう、逃げることはできない。

1人の娘を見送った母がいた。

彼女は特異な体質であり、生きること自体に困難を極めた。

それは彼女の子ども自身にも遺伝し、その子供は父から虐待を受けることとなった。

彼女はそのことを酷く悲しんだ。

贖罪のためにも、彼女はその子供を心より愛した。

夫の手前では可愛がることができなかつたが、できる範囲の愛は注いだ。

そして、ある日、娘が旅立ちを決意した。

彼女の時もそうだった。彼女の悲しい人生の始まりは、自発的な旅だった。

これから彼女が同じ道を辿らないように、彼女は最後にまじないを二つかけた。

それは、彼女の娘が、応援してくれた故郷の人々の顔を忘れるようにするものだった。

彼女が旅立ち、熾烈な道程の中で、出発する時の期待を向けられた顔が足枷になった。あの顔が、私の中に居座って、『いつになったら目標を達成するのか』と言っていた。

娘にその足枷を外すために、顔は思い出せないくらい忘却させるのまじないをかけた。

そして、もう一つは、最後に彼女のいた場所に戻るまじないだ。

これは彼女自身の眼を使ったオリジナルの魔術であり、試したことがないため、成功するかどうか分からなかつたが、最後の最後は故郷に帰ってきて欲しいという願いがあつた。

娘を見送って、屋敷に戻ろうとすると、数人の武士たち足音が聞こえた。

「彼女はどこにいますか!？」

彼女の出発したと思われる方向へ指をさした。

「ありがとうございます。では」

足音が次第に遠くなる。

私は再び屋敷に足を進めると、あの予感がした。

別世界飛ぶ穴が開く予感だった。

まさか、娘もう飛んでしまうのかと思ったが、そうではない。

このお迎えはきつと自身の物だと直感で感じ取った。

あとは人目を盗み、放浪していた時の格好になって、世界を飛んだ。降り立ったのは荒野だった。

辺りにはグールが蔓延っていて、異臭が漂っている。

その場をなんとか乗り切って、聖堂教会との協力をこじつけ、事件の解決の協力をした。

その聖堂教会の友人に誘われ酒場に行くと、むき苦しい空間の中で、太陽のような子を見つけた。

思わず近づき、抱きしめたくなる。しかし、それは必死に耐える。

彼女は私の顔を思い出せないようになっていた。

突然人に抱きついたら不審者と疑われてしまう。

魔術で声色を変え、彼女の記憶を刺激しないようにしようとして心に決め、彼女のいる席へ向かった。

「マスター!!それ!!」

彼女は酒を指差してマスターを読んでいたが、呂律が良くなく、うめき声と勘違いされているようだった。

私は彼女の代わりに彼女が指差した酒を注文して彼女に尋ねた。

「隣いいですか?」